６．質疑応答

櫻井　はい、黒須先生、どうもありがとうございました。

残り 10 分少々ありますので、少し全体の質疑の時間に移ります。何かご質問がありましたら、ご所属とお名前、それから、だれに対してかを加えて、質問していただきたいのですけれども、いかがでしょうか？

では、ちょっと口火を切ります。黒須先生の発表で、人は美男だから美女だから、ということが結婚の材料でないのだなというのがよく分かったのですけれども……冗談ですよ、はい。キヤさんのところのご職業は？

黒須　キヤさんは下守屋なのですけれども、あの辺の仁井田・下守屋というのは、もうほぼほとんど農民です。ですから、そのような意味で、先ほど使いました経済指標も、持ち高が何石かということで見ています。ただ、日出山は農民以外の職業もあったようです。

櫻井　ありがとうございました。はい、岩佐先生。

岩佐　麗澤大学の岩佐と申します。今日は本当に興味深く、初めてこのような研究に接することができました。ありがとうございました。

宗門改帳は「士農工商」のすべてのひとびとにわたってあるのかどうかということで、それは階層が違えば､そこにかなり違った特徴が出てくるのかどうかということが一つと、今取り上げられたキヤさんは、非常にドラマチックなのですけれども、それは非常に典型的で、その当時をかなり代表しているような例なのか、それとも違うのか、ほかの女性はどのような生き方しているかという、つまりキヤさんの位置づけも、ちょっとお尋ねできれば、と思っているのです。黒須先生でしょうか。

櫻井　髙橋さんと黒須先生ですね。

岩佐　一番適切にお答えいただける方で結構だと思うのです。

櫻井　では、まず髙橋先生から。

髙橋　それでは、まず史料のことについてご説明したいと思います。今ご質問いただいたのが、史料が「士農工商」のすべてにわたってあるのかということなのですけれども、「士農工商」の区別が私たちの利用している人口史料に記載されるのは明治の戸籍からです。人別改帳は、その前の史料です。ですから、「士」は別としまして、記載されたひとびとが「農工商」のどれに当たるのかというのは基本的に難しいのです。ただし、江戸時代は、

兵農分離で、武士は農民と同一史料には記載されませんから、基本的に私たちが使っている村の史料では「農民」が中心となります。都市の宗門改帳の場合には、その都市の性質にもよりますが、「農」の場合よりも「工」や「商」の場合のほうが多くなります。江戸の人別改帳のように職業が記載されているものもあります。

ただし、村の史料であっても、例えば持ち高がある、石高があるからといって、本当に農民なのかというと、私が使っている在郷町――村から町へと変化したところですが――の史料では、商人、あるいは工に当たる人も含まれているかと思いますが、身分上は、持ち高がある農民として記載されています。

それから「士」です。武士についても、人別調査はあります。史料も残っています。このことに関しましては、そちらにいらっしゃる安澤秀一先生がお詳しいと思います。しかしながら、基本的に身分が違うときには、一緒に帳面は作られません。別に作られるわけです。そうすると、私たちが使っている、いわゆる在方に残されている史料ですと、武士は入っていないことが多くなります。

さらに、被差別民の人別調査も別途に作られることがあります。また、同じ農民の中でも、時々、身分が変化する場合があります。献金をして名字帯刀を許されると、氏族扱いになり、帳面から抜かされるというようなことがあります。そのような違いがあるということでよろしいでしょうか？

黒須　キヤさんの例は非常にドラマチックで面白いので、お見せしました。あれが典型的とは言えませんが、そんなに変わっているということもないのです。

つまり、最初に初婚について申し上げましたが、初めて結婚した人たちの一生を追ってみます。生命表という方法で、初めて結婚をした中の生き永らえた人たちを見るという方法があるのです。それを見ますと、その中の 40%は５、６年のうちに離婚するということで、離婚は非常に多発していました。今のように、離婚が毛嫌いされるような社会では全くありませんでした。かつ、その離婚した人たちをさらに見ますと、70%が３年から４年の間で再婚します。

というわけで、結婚、離婚、再婚というのは、その規範というかアイデアが、随分今と違ったようです。

櫻井　はい。ほかに。では、そちらの方。

オキ　日本学術振興会のオキと申します。ほぼ門外漢ですので、すごく素朴な質問をさせていただきたいのですが、この時代の結婚のあり方について、実はあまり知らないなと気がつきまして、例えば地方などだと、試し婚のような形で、若干家に入って出るようなこともあったと聞いています。

例えば、行政というかアドミニストレーションという感覚があるのか分からないですけ

れども、どのような形をすれば「結婚が認められた」というように、当時の農村なり社会で定義されていたのか、すごく簡単でよろしいので、伺えればありがたいと思います。

櫻井　どなたに？　黒須先生でいいですか、髙橋さんですか、はい。

髙橋　今のご質問は、本当に重要なところです。日本の結婚というのは、その意味で難しいのです。つまり、外国のいわゆる parish register のように、結婚したという時点が分かるような史料ですと、「ここで結婚」と言えるわけですけれども、日本ではそれがありません。足入婚も、もちろんあります。

これは地域差がございまして、足入婚があるところで、極端な例では、人別改帳上は子供が生まれてから「結婚」になっているような例が、かなりあります。そうすると、どこを本当に結婚年齢としていいのかというのが、すごく難しい問題として上がってくるわけです。

ですから、地域ごとの差があります。つまり、例えばさきほど黒須先生が報告された仁井田・下守屋の例ですと、十幾つで結婚と史料に記載されていますが、この結婚の意味を考えなければいけないわけです。この「結婚」はここでは、再生産のための結婚ではなかったのではないかですとか、いろいろなことが考えられるわけです。

ですから、そのようなことを考えますと、国際比較を行っていくうえでも、結婚というのは一体、その地域でどのようにとらえられていて、どこをもって結婚とするのかというのは、本当にいろいろな史料から構築していかなければいけない問題です。

もちろん、農民であってもかなり上級の社会、上流の社会というか、ある程度、庄屋や名主レベルですと婚礼の儀式が行われることがございますから、そこをポイントとすることもできますが、本当に私たちが考えていかなければいけない問題の一つです。

櫻井　よろしいでしょうか？

オキ　ありがとうございます。

櫻井　はい、ほかにございますか？　はい。その後ろの方。

シノハラ　面白かったです。ありがとうございます。国際基督教大学の学生のシノハラといいます。速水先生の本を読むと、平均年齢、寿命が現代では近世の倍近くに伸びていて、現代人と近世の人では、もう違った生物に近いというようなことが書いてあったのですけれども、その離婚、結婚率のようなものを考えたときに、単純に現代と近世では比較できないのではないかということを思ったのです。その辺、どうお考えかちょっとお聞かせください。

櫻井　どなたにお答えを？

シノハラ　では、黒須先生にお願いします。

黒須　すごく面白い質問というか、アプローチになりますね。寿命が伸びるのと、つまり死亡率と結婚年齢というのは非常に関係があるという研究を、実は斎藤修先生がされています。ですから、もしかしたら寿命が伸びる、平均余命が伸びることと、結婚年齢が上がることというのは、相関関係があるのではないかなというのが分かります。

ただ、だからといって、現代と近世とが比較できないのではないかということは、ないと思うのです。先ほどの質問にもあったのですけれども、やはり、その定義をしっかりとするということです。その定義を説明できるということで、例えばわたしが今使いました「結婚」は、人別改帳では「縁づけ」や「呼び取り」などで、入ってくるということです。

ですから、その人の行動の記録から、結婚を復元、あるいは構築しているということになります。そのようなことをしながら定義をしっかりして、かつ、死亡率を含める経済社会状況を考えていくと、比較が面白いものになってくるのではないかと思います。ありがとうございます。

シノハラ　あと一つ質問があるのですけれども、これは全体に対してちょっとお聞きしたいのですけれども、例えば速水先生の本などを読んでいくと、その地域ごとの結婚年齢の違いとか、日本の中での多様性というのも、同時にすごく見えてくるなというのを思うのです。

その点で、このような勉強をしていくと、この一つの事例を取って、「すべての日本」のようなイメージができやすいと思うのです。地域研究と全体を考えたときの、その折り合いというのですか、そのようなものは、歴史人口学でどうお考になっているのかというのをお聞かせください。

浜野　それでは、私のほうから回答したいと思います。結婚年齢に関して、今、地域差があると言われましたが、確かにそのとおりです。東北の事例では、今、例えば 10 歳で結婚とか、男性でも 18 歳というような数字が出ておりますが、逆に西日本、例えば私が研究をした山口県の事例では、男性の初婚年齢が、例えば 26 とか 27、女性でも 22 とか、現代にかなり近い初婚年齢であったところもあります。

なぜそのような地域差があったかと言いますと、その地域の状況、特に東北の場合は死亡率が非常に高いということもあります。例えば速水先生の説明の中に、世代間差というもの、一つの世帯の中にたくさんの世代がいるということで、さっきの話がありましたが、おじいさんおばあさんもいて、孫までいるそのようなところなら、例えば、だれかが死ん

でもだれかがカバーするとか、あるいは中間の世代の人が出稼ぎに出ています。父親が出稼ぎに行くとか、母親が出稼ぎに行くというようなときには、世代がたくさん一つ世帯の中に入っていたほうが安定的です。そのようなことを考えると、一つの生き残り、生存の戦略として早婚が選ばれるというようなことも、当然あったと思います。

したがいまして、単にその地域差というだけではなくて、その背景になぜ地域差が出るかということは、非常に現代とは違って、複雑な事情が隠されていたというようなことも、いろいろな研究から分かってきている内容だと思います。以上です。

櫻井　はい。

黒須　ちょっと国際研究との関係について付け足します。先ほど、本を一冊、やっと 10 年かかりまして出し、賞をいただいたという話をしたのですけれども、やはり一番突かれるところがその点なのです。「国の比較をしているのではなくて、ただ単に一コミュニティー、一農村の比較ではないか」と言われます。

確かにそのとおりなのです。ですから、私たちが比較という場合に、「５か国の比較」と、さっき簡単に言ってしまいましたけれども、５か国ではなくて、それぞれの国々のある社会、ある農村、ある教区、あるコミュニティーを比較しているということに気をつけて言っているつもりです。

ただ、では、「典型的な日本」とか「典型的なトスカニー」はあるのだろうかというと、やはり、なかなかないのです。先ほどライフコースを束ねる話をしましたけれども、もう少しいくつかの村をじっくりと見ていきますと、似通ったパターンが浮かび上がってきます。これが「地域性」といえるのではないしょうか。

そうしたときに、ある農村やコミュニティーであったものから、「地域」というもう少し大きな話ができると思います。それにもっていくために、これから、ますますたくさんの事例を研究していかなければならないなという感じです。多分、その辺りは、「地域比較」ということで、次のシンポジウムのテーマにいいですね。ありがとうございます。

櫻井　そろそろ時間なのですけれども、「これは、最後にどうしても」という方、いらっしゃいますか？いらっしゃらないようですので、これでシンポジウムを終わらせていただきます。どうもありがとうございました。